

TBS 放送

「ワールド極限ミステリー」 #53

映画「ハチ公物語」に描かれなかった新事実

令和4年(2022)6月1日放送

渋谷駅で亡き主人の帰りを10年待ち続けた忠犬ハチ公に会った人が語る感動の実話。

大正13年(1924)秋田から上野英三郎教授(東京帝国大学農学部、日本の農業を近代化へと導いた農学博士)のもとにやってきた。生まれつき胃腸が悪く体調を壊すことが多かった犬だったが、教授の看護により元気に育って大変懐いていた。ハチは毎朝教授を大学や渋谷駅へ見送りひとりで家に帰り、また夕方には迎えに行っていた。1年4か月後(大正14年)先生は学校で倒れ亡くなった。その後も、ハチは毎日渋谷駅へ迎えに通い続けた。奥様が引っ越した後も10kmある渋谷駅に通い続けたので、駅に近い知り合いに預けることにした。

このころ、おとなしいハチは野犬に噛まれ左耳が垂れてしまった。また、ハチに付けていた胴輪が盗まれた。(当時胴輪は安産のお守りになると言われ高値で売れた)

その結果、胴輪が無いので蓄犬でなく野犬扱いされた。

当時の日本では狂犬病が大流行し、野犬狩りに捕獲された。大正15年警視庁狂犬病予防法により、野犬は確保し処理することを推奨し、賞金を付けられることもあった。

ハチも野犬狩りで確保されたが、飼い主の娘さんが見つけ親の助けを得て、取り戻すことができた。

大正から昭和に代わり東急東横線が開通し渋谷駅付近は賑わいを見せはじめハチを知らない人が増え怖がり疎ましく思う人が多かった。

こんな時期、昭和7年(1932)朝日新聞にて「いとしや老犬物語」と題して、今は世になき主人の帰りを待ちかねる7年と記事が報道された。それから、ハチは人気が出て見学の行列ができた。ついには、昭和9年(1934)ハチ公の銅像がつくられた。この時ハチ公は生きていた。翌昭和10年まで、通い続けて息を引き取った。



写真はハチ公の実物

所蔵：白根郷土博物館

テレビ画像より



テレビ画像より



放送に使用された写真

昭和29年野犬狩り

写真提供：NKTK(奈良県立図書館今昔写真蔵)